

住友回想記

平成25年11月30日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

明治40年(1907)、新卒の第1期定期採用がスタートした時に東大法科出身者7名の一人として入社。理事、常務理事に就任後、昭和11年(1936)には、鈴木馬左也の後任の総理事の就任がほぼ確定していたが、自らの器に非ずと自己都合で退職した。「自分がやったという仕事はない。すべて組織の共同作業である。」というのが川田の職業感であった。幼いころから金銭的には淡泊で、潔癖な性格による身の引き方である。短歌に経営にその才能をいかんなく発揮した川田順が記した随筆を通して、大正から昭和初期に至る住友の発展推移を読んでいく。

2. 本の刊行

昭和26年	中央公論に掲載	「住友番頭記」
昭和26年 7・8月	産経新聞に連載	「住友回想記・前編」
昭和26年 9・10月	産経新聞に連載	「住友回想記・後編」
昭和26年12月 1日	「住友回想記」	発刊
昭和26年12月20日	「住友回想記」	再版発刊
昭和28年 2月	「続・住友回想記」	発刊
平成 2年	経済人叢書として	榊原書出版社から再度刊行。

(新漢字表記で分かりやすい。なお、日向方斉の解説が付けくわえられている。)

3. 本の構成

序章	住友番記	6編
第一章	住友回想記・前編	30編
第二章	住友回想記・後編	34編
第三章	随行紀程	

4. 本の概要

序章 住友番記

01. 角帯小僧

役人になるのは嫌いだった。三井や三菱は既成で面白くない。日銀の河上謹一を日本一の月給取りで迎えたことがあるので、将来は日本一の月給取りで同時に日本一の歌人にな

つたらいいくらの考えで、新進の住友に入った。銀行の支店に事務見習いにやられ、東京育ちが、大阪で和服の着流しに角帯で勤めた。養子の話もあったが、断った。

[住友に入る：もう一つの理由は、成就できない恋人である徳川慶喜の八女・国子から離れるため。新卒の採用試験は終わっていたので、穂積陳重教授から鈴木馬左也総理事に紹介してもらい、面会した。「よろしい。」の一言で採用された。鈴木は川田の父が高名な漢学者で且つ宮中侍講であることを知っていたから。]

02. ワン・マン鈴木

住友の総理事7人の内、鈴木、中田、湯川、小倉の4代に仕えた。鈴木は教養が深く、風格もすこぶる高かった。名実ともに住友の大御所で、飛ぶ鳥を落とす勢いがあった。住友は明治・大正の20年間発展した。

内部職制の改正、人事異動で副支配人兼課長から課長に落とされる侮辱を受けた。大阪毎日新聞の学芸部長の薄田泣菫に退職後の食べる用意を頼んで、鈴木と膝詰談判に臨んだが、相手が1枚上だった。その後は大事にしてくれた。住友製鋼所の大騒動のときには支配人として解決のために出向させられた。

03. 製鋼所

製鋼所に乗り込んで労働と経営の両面から改革した。旧来の親方制度を廃止するために親方共を解雇した。製造品種目を鉄道関係に絞り込み、軍需品はお断りした。

西尾末広が旋盤工で働いていたが、支配人として乗り込む直前に退職していた。やがて西尾が組織した労働総同盟に外部から攻撃された。

04. 野暮と鷹揚

住友の社風は正しく、つつましく、そして強健であったが、何となく野暮だった。事業の種類と住友人の田舎出身者の多さによったようである。

住友人は、鈴木の影響で禅、茶の湯、謡曲に多少関心を持っていた。文学文芸に対する理解の標準も低かった。久保のドイツ文学、小倉の漢詩研究位が少々ものを言った。柿本人麿を健康的に感じ取った鈴木は隅におけないと思った。住友は北浜の象牙の塔から大阪市中を見下ろしていた。だから船場島之内では、住友社員を婿にしたがった。

鷹揚 おうよう おっとりして上品なこと。

05. 薄給

住友人は実業界では驚くべき清貧であった。原因は、無い袖は振れないと、鈴木の人生活観が薄給主義であった。「国益を先にし、私利を後にすべし。」という伝統的社是が鈴木に

よってさらに高調された。無為無能の男が出世していたのでは、会社の業績は上がらない。

度が過ぎた薄給は、第一次世界大戦で儲けたときにも、紡績会社の友人に「ケチな特賞をもらったそうだな。」と冷やかされた。住友銀行門司支店長が所得申告したところ、税務官が年収を月収と勘違いして「住友さんは三井さんより多い」と感服した。

大正末期、三井では自家用自動車を買えないような薄給を与えていないと言われた。三井物産大阪支店長の月給の方が住友総理事のそれより多かった。

昭和7年下期に、同期の仲間の所得税を調べ用意周到のもとに、賞与を3倍にして住友全員に与える決議録を作ってしまった。小倉は「もらった人が十分満足するように与えないといけない、中途半端なことは役立たないよ。」としばしば語った。

06. 変種

黒崎幸吉—数年で住友を去る。内村鑑三の高弟で、牧師、聖書研究者として屈指の人。

江原万里—黒崎の義弟。内村の愛弟子で、住友を去り東京帝国大学の助教授になった人。

久保無二雄—少年の頃からドイツに留学し、帰国後は学習院の教授になった。日本人として最初にドストエフスキーを知った人。東京帝国大学の総長に擬せられたり、ドイツ大使に推薦された人。

大平駒槌—藤田組から住友入り。四阪島製錬所の改革などを遂行し鈴木総理事に知遇されたので、彼の死去とともに住友を去った。その後満鉄の副総裁になり、枢密院顧問になった人。東京帝国大学に在学するとき、借金の取り立てに追いまくられて、狂人を演じて逃れる。

川田 順—住友の首脳の座をなげうち、東宮殿下御作歌の指導物になった人。

山口誓子—住友の重役になれたのに天下の俳人になった人。

泉 幸吉—住友王国の家長で歌人。齋藤茂吉に師事。14・15歳ころに川田が和歌を手ほどきした。

[図書出版社版のP. 27の「明治37年、久保のドレスデン滞在」の記述は、正しくは明治17年。初版の中央公論社版が正しい。]

第一章 住友回想記・前編

07. 永遠の住友

「たいへんです。大阪は軒並み倒れました。立っているのは、天王寺の塔と住友だけです。」昭和初年の大恐慌の時の三菱商事大阪支店長・柳瀬篤二郎の本社への報告である。仏塔も諸行無常。財閥も大恐慌、敗戦を経て生者必滅のならい。しかし、二百数十年来の伝統で鍛え上げられた住友の特異精神は、分散して再出発した数々の新規事業形態の中に、とこしえに生きて行く。

08. 大阪に第一歩

銭湯に行って下宿への帰り、道に迷った。東京の縁日の植木はいかさまが多いので買わないが、大阪の人は値切って買って行く。紙屋で高飛車に言うと主人にそっぽを向かれた。歩き疲れて人力車に乗ろうとしたら下宿が近くだったので乗車拒否にあった。大阪人は金銭問題になると真面目な態度になるのに感服する。

09. 譜代の家来

執務時間中に舶来雑貨を売りに来る着流しの若い男がいた。「タヌキ、タヌキ」と呼ばれていた。妙な名前の男と思った。毎年春の彼岸時分に「家長誕辰の宴会」が中之島ホテルで催された。家の子郎等を招いて御馳走する。私も呼ばれて末座にちいさくなっていると「タヌキ」が羽織袴で来て上座に座った。

タヌキの優遇を先輩に聞くと、二百数十年前に備中吉岡銅山の支配人として勤めていた田向重右衛門の十数代目の孫であった。重右衛門は、元禄3年の別子銅山探検で大鉱床を発見した功労者である。先祖の功労によって田向家は住友末家に列せられているのである。

翌年の宴会で「イズカン」を知らんと先輩に叱られた。心齋橋の「おしろい屋イズカン」の泉屋勘七であった。田向と別子銅山探検に行き、別子支配人として元禄7年の火災で亡くなった杉本助七の末裔であった。

朝場重三という同僚は、住友孝子と乳兄弟であった。

【「タヌキ」と呼んでいることから、田向重右衛門の姓はタムケでなく、タムキある。】

10. 紳士招待会

明治末期から大正にわたって、秋の彼岸の頃に、住友が大阪の官民の主たる200人内外を中之島に招いた。大阪は町人の天下で、町人の大者が住友吉左衛門であった。招待されることは、大阪の人にとっては最大の関心事であった。住友の諸会社からもいろいろ招待してほしい人についての注文が付けられる。招待者が決まると席次表づくりが一苦労であった。招待された紳士は燕尾服を新調するので「住友服」というようになった。

11. シーメンス事件

石山を訪れて子息の六郎から、シーメンス事件に関する曾我しょうはく白の描く屏風一双を見せられた。

大正3年、住友諸工場の製品を販売する店舗を東京に設置して、初代の店長として赴任していて海軍省で藤井光五郎少将に面会した。間もなくシーメンス事件の大疑獄が起こって、藤井少将の名前が連日新聞紙上にさらされた。住友も検査されたが「量を叩いても埃が立たないとは、住友のことだ。」と言わしめた。住友家長は、石山の伊庭のところに使者をやって「住友の今日あるは、貴下が多年、徳を持って社員を指導し、伝統の美風を守り

つづけてくれた賜物。」と感謝の辞と、蕭白の屏風を贈った。

〔蕭白の屏風を贈った：「蕭白の屏風を贈った。」は、川田順の潤色で、実際は楼蘭山水の屏風画である。昭和16年(1941)、近江神宮に奉納された。重要文化財指定。〕

12. 石山の高士

広瀬は力の人、策の人であったが、伊庭は心の人、徳の人であった。鈴木は力と徳を備えていたが、広瀬、伊庭には及ばなかった。

伊庭は、日本銀行の河上謹一を日本一の高給で迎えたというが、三井は東洋一の高給で中上川彦次郎を招聘した。住友と三井の差である。伊庭の偉いのは、60歳にもならないうちに、43歳の鈴木に総理事を譲ったことである。伊庭のような心境の人ばかりだと、追放などはなく、滑らかに新陳代謝、革新が行われる。伊庭の最期は美しかった。

13. 金山買収

大正6年の初夏、住友総本店の経理課長をしているときに、北海道北見国紋別の鴻之舞原始林の中に大金鉱の露頭があるとの噂を耳にした。久原が聞きつけて50万円で買おうと申し込んだが拒絶された。

昔からヤマという鉱山ほどあぶないものはない。知り合いの藤田組の重役の桂与一も「鉱山は100件扱って1件しか当たるものはない。」と告白していた。経理課長6年で、買ってくれと申し込まれたのが約200件、その中で書類審査して断ったのが170件、実地調査したのが30件。その30件の中で買収したのが6件。6件の中で稼業して利益を上げたのは2件。住友だから立っていくが、たいていの金持ちが鉱山で潰れるのはごもつもの次第である。

小倉たち上司は強気で、この金山に対して警戒していた私に買収の交渉に当たれと命じた。地権者8人を大阪に呼んで、ミナミの旅館に缶詰にして談判した。多量の金を産出して国益は上げたが、住友の利益にはならなかった。

14. 商事と製鉄

昔から富は朝露に譬えられ、浮雲に形容されるように危なかつしいものである。約30年務めた住友でもひやりとしたことが両三度あった。大正3年から7、8年にかけて商事会社が筍のように生え出した。堅実無比の住友でも中堅層からこの筍をはやしたいとの運動が起こった。大正8年、欧米視察から帰朝した総理・鈴木馬左也の鶴の一言で葬られた。住友銀行ニューヨーク支店に立ち寄ったとき、大島堅造が断々乎として反対したので、鈴木は腹が決まった。

鈴木は四阪島のカラミを原料として製鉄所を起こす夢を抱いていたが、アメリカのピッツバーグの製鉄を目撃して「住友独力ではできない。」と大悟した。芯から諦めてもらって、

住友は幸運だった。

鈴木は大正8年に九州の炭鉱を買収の肚を決めていた。三井物産大阪支店次長で、義兄の河原^{てい}糧一郎が注意してくれて間一髪で中止した。

15. 昔の労働者

大正5年に工場法が実施されたが、住友はすでに積年、法律よりも手厚い待遇をしていた。それでも時勢の波は押し寄せた。大正6年、電線製造所及び住友製鋼所が同時に争議の津波に襲われた。現場職員は頑張ったが、住友総本社が弱気のため挫けての解決となった。工場協議会の設置は時代に先覚するものであったが、組織が拙なくて労使の摩擦も多くなる結果となった。製鋼所旋盤工の西尾末広は、この争議で住友を去った。労使双方が成り立つ時代が来ないものかと思う。

昔、庵地保という人がいて、職員も職工も心服していた。至急の注文時には終業時の時計を1時間後戻りさせたが、不平も言わずに5時まで働いた。日露戦争の終わりの時の人員整理では、退職金をくれる会社などめったにない中、退職金を手渡した。そのころの労働者はまことに気の毒なもので、雇主に対して何の防衛力もなかった。

16. 社交ダンス

保守的と世間から批判された住友も、実は進歩的でハイカラであった。鈴木時代になると住友に最も似合った業種の鉱山、重工業、金融業へと力に集中した。それが上策だったか否かは永遠の謎で終わった。銀行は早くから海外支店を開設し、鉱山や工業でも外国資本及び技術との提携も大胆に実行した。四阪島製錬所でのフーゴー・ペテルゼンとの契約、硫酸肥料製造での技術はアメリカのN・E・Cから譲り受け、電線製造もアメリカのウエスタン・エレクトリックと提携、日本板硝子の創設はアメリカのリビー・オーエンズの技術伝授。

フランス人及び資本で経営された帝国酸素会社に送り出した小高親は、三菱から住友に転じた人であるが、社交ダンスの鼻祖であった。住友電線、製鋼両工場の争議中に中之島ホテルでダンスを享樂して鈴木総理の逆鱗に触れた。大阪朝日にダンス論を掲載したので今度は助かるまいと心配したら、悪運強く住友代表の帝国酸素常務に栄転した。

鼻祖 中国では、胎生動物は鼻から作られると考えたことから、最初に物事を始めた人。元祖、始祖と同義語。

17. 近松礼讚

大正11年に近松門左衛門没後200年祭りが催され、講演会に引っ張り出された。文学好きが大阪にきたので、近松ゆかりの地、文楽の太夫などを訪ね歩いた。

18. 鈴木と松方

住友財閥という過去の一存在について歴史の一端を書いている。

大正11年、鈴木馬左也の葬儀の帰り松方幸二郎と一緒になったとき「君達が鈴木を殺したんだ。」と言われた。住友人が寄ってたかって、鈴木を祭り上げて「ワン・マン」したとのことであった。鈴木はそれだけの器量を備えていた。松方は少々利口であっただけだけれど、松方コレクションは鈴木にはできない、立派な脱線であった。

鈴木は「自分でなければ住友は収まらない。」との信念で、死ぬまで総理を辞めなかった。権勢欲といったケチな人間ではなかった。質素な住友の中で鈴木だけが豪奢であった。その道の道楽では益田孝などに引けを取らなかった。住友内部では、群鷄の孤鶴であった。

益田孝 三井銀行入社後、三井呉服店(三越)に移り、経営改革を実施する。世界初の総合商社・三井物産の設立にかかわり、更に日本経済新聞の前身である中外物価新報を創刊する。鈍翁と号し、千利休以来の大茶人と称された。

19. 定年制

鈴木馬左也は死ぬまで住友の総帥でいたであろうことは疑う余地がなかった。パリ講和会議でのクレマソンを評した時に、私にはピンと来た。

鈴木の後継に総理になった中田錦吉は、碁を打ち、シガアをくゆらすだけで、何もしないように見えたが、社員55歳、役員60歳の定年制実施という大改革を一つだけ敢行した。自分が制定した定年制によって3年で退職した。次の湯川寛吉は定年制の例外規定で延長して総理を5年務めた。鈴木の後半10年は多数の壮年社員の出世を抑え、人心が倦怠してきたことも事実であった。官吏でも会社の役員でも、たいていの所では潔く退却すべきである。

[定年制の実施：鈴木馬左也の19年間の長期政権の弊害からの改革である。]

20. 鷲尾和尚

大正14年15年の交、別子銅山の争議を弾圧した鷲尾勘解治は、住友の中の異才であった。明治40年に住友は初めて法学士を多量に採用した。東大7人、京大5人。鷲尾は大徳寺の飯炊き小僧をしながら京大で学んだ。別子勤務では鉾夫と共にハンマーを揮った。入社最初の昇給のとき、鷲尾だけが抜擢され月給が20円多くなった。東大組は京大への対抗心から重役への直談判を企てたが7人がそろわずに腰砕けに終わった。

大正末の争議に、西尾末広、加藤勘十、麻生久、藤岡文六などがそろって応援に来たが鷲尾は驚くこともなかった。平気で臨済録を読んでいた。峨山と伊庭、広洲と鷲尾はちょっと似たところがあったらしい。鷲尾は労働者を可愛がり、常に彼らの味方であって、生活改善に不断の努力を続けた。争議では「暴力」はいつの世も勝利しない。

21. 住友男の臨終

大正15年元旦、組合の数人が嫌がらせで住友本邸に土足で乱入してきた。住友男爵は重病だったので物々しい警護体制をとった。前線に哨兵が配置された。

3月2日に男爵は63歳で他界した。大争議の影響で、寂しいものであった。私も末席でもらい泣きをした。後で久保無二雄に「男は泣くものじゃないぞ。」戒められた。

葬典は、さすがに大阪未曾有の盛儀であった。大阪市民の数万人が哀惜し、焼香の列が続いた。積善の余慶とはこのことであった。彼は慎み深く、道楽の少ない方であった。

22. 狂歌師にあらず

住友総本店に入社した当時、庶務係の主任で几帳面な佐々木高助の机の上に狂歌の半紙を置いた事件があった。犯人はてっきり川田だと思って「川田君。」と叫んだ。川田は「僕は歌人です。狂言師ではありません。」と大声で答えた。忘れていたことを狂歌の作り手・加太重邦に教えられた。

23. 玄関子の無礼

住友総本店で、来客の後からリノリュームを使丁が拭くことが定評になりつつあったので、玄関の受付を改善する討論をする。ある重役は「ぞんざいな受付はいない。」と言った。その重役は東京に出向いたとき、住友銀行日本橋支店の受付で横柄な態度で馬鹿にされた。商鞅の法は己に返る。

商鞅の法 商鞅は秦の国政改革を進め、後の秦の天下統一の基礎をきずいたか、周囲の妬みを買って処刑された。

法律を作り徹底させた弊害が、とんだ結果としてわが身に降りかかること。

24. 技術家重役

住友1.5億円の資本は、金融資本と産業資本に大別され、前者は銀行、倉庫、信託、保険で、後者は鉱山、炭鉱、林業、製造工業、水力電気である。別子銅山に発祥した住友も大正以来は産業資本の方の増加率が大きく、仕事もたくさんに分岐する傾向にある。おのずと技術者の数も増えてきている。技師で専務、常務、支配人になる人も増えてきている。小倉も人徳で次の総理に古田を抜擢した。

25. 鮎人種

住友の中には、小柄で智慧者の「鮎人種」が多くいた。最も大物は総理の古田である。

26. 大阪弁

昭和21年の天皇陛下関西行幸で、京都の大宮御所で新村出、谷崎潤一郎、吉井勇、川

田順の4人で文芸座談をお聴かせしたとき、谷崎の説明から言葉の味わい方を学び、大阪弁が嫌いだと簡単に片づけることを反省した。

東京人の悪癖で地方に対して優越感をもつ。古典の近松には崇拜するが、現在の大阪ことばを卑しく感じる。住友在職中に大阪弁の悪口を随筆に書いて、ひどい目に逢ったことがある。

27. 天下の俳人

「サラリーマンは金ですべてを打った憂き川竹の流れの身とは違うので、会社に勤めながら、他のことにも精通したとて、少しも差し支えない。」が、私の信念である。だからこそ、上司や同僚から文句が付けられないように、人一倍会社の勤めに精励しなければならない。「ここは大切。」と思った場合は身命を顧みず働いた。

同僚の山口誓子は、芭蕉、蕪村、子規の系列に加えられるべき俳人で、会社の勤めに人並み以上に精励した。

28. 起案の決済

起案という官僚的事務方法で、ベタベタと判を押す。早く判をもらうのが下級サラリーマンの能否の岐かれ路である。

今村専務は判を押さずにサインした。サインは5種類に分かれていた。佐藤常務は押印が3種類に分かれていた。下僚らは、その日の感情の起伏に一喜一憂した。銀行とか信託とかもとても冷静で感情を否定する仕事をしながらも、人間の抑制しかねるものが見える。

29. 職工学校

未知の人から手紙をもらって住友職工養成所のことを思い出した。明治44年に恩賜財団済生会創立のために政府から莫大な寄付金が仰せ付けられたが、鈴木馬左也は独力で社会事業を計画中だからと断った。積極的防貧事業として職工養成所を設立し、約30年間で2,100人の卒業生を社会に出した。

嵯峨清凉寺の吉左衛門の命日に十数年間欠かさずに参拝する3人があるので、住職が感服して茶屋に招いて聞いた。住友製鋼所の合理化のときに、住友男爵が視察に来て「破損箇所を修繕にあたらせたら人減らしをしなくて済む。」と言われて解雇されずに済んだとのことであった。

30. 易水寒

住友で洋行したのは、技師が最も多く、次は銀行員少々であった。ただの事務員で海外へ留学させられたものは皆無であった。北沢敬二郎がアメリカのプリンストン大学に入る時、杉浦庶務課長は「学モシ成ラズンバ、死ストモ帰ラズ」の漢詩に託して短刀一口を餞別品として渡した。

杉浦課長が、別子銅山に何事かが起こりそうだとの知らせを、鈴木総理の邸宅に夜中に持っていったとき、鈴木は謡を終えて「明朝会社で衆知を集めて。」と答えた。偉いか知らぬが、芝居じみていないか。

易水寒 「史記・刺客列伝」の中の易水のほitoriでの歌「風蕭蕭兮易水寒」の一部。
春秋戦国時代には、敵国の王侯を刺殺するために、一本の短剣にすべてをかけて敵地に乗り込む刺客が多かった。

31. 颯爽たる引揚者

昭和21年、山添程次が大連から引き揚げてきたとの報告に北白川に来た。折り目正しい背広を着用し、中折れ帽子をかぶり、手にはステッキまで携えていた。ソ連兵、中国人も見てるので、何もかも置いてきたが風体だけは日本人らしく乗船してきたとのことであった。源氏鶏太の「英語屋さん」の話と同じである。山添のエピソードについては私が鶏太に話していた。

「あんな平凡なことが小説のネタになるのなら、今度の敗戦後の1ヶ月あまりの経験は、内地の人には想像できない。シェクスピアなら前代未聞の悲劇を書くだろう。」と山添は言い残した。

32. ドル買の真因

昭和6年、満州事変突発とほとんど同時にドル買問題が起こった。極右や軍部の素人達が三井、三菱、住友などの諸大銀行を国賊呼ばわりした。そのとき小汀利得が論を新聞に連載した。

大連のホテルで小汀と初対面した。名刺を見て「ヲバラさんと訓むのでしょうか。」と挨拶したら「初対面で訓めた人は初めて、歌人は違ったものですな。」と感服してくれた。

戦時中、大政翼賛会の議員に指名されたとき、会議でいっしょした。小汀は、「防水服はあるが、防空服はない。」とがんと反論した。珍しく敬愛した。

33. 貧乏の賜物

通信省から住友に入り、後に総理になった湯川寛吉は甘いも酸いも噛分けた苦勞人であった。医者の家を嫌って法科に入ったので学費を絶たれた。鈴木は儒教的であったが、湯川はドイツに留学していたのでヨーロッパ的であった。

明治の末、桃谷駅の側に新家庭を構えていたとき、湯川から45円の月給で22円の家賃を払っていることから兄の厄介になっていることを見破られ、本当の人間になるために貧乏を味わうように言われた。

大正3年の春のシーメンス事件で、松本中将が法律上の罪人になったが、賄賂を取るような人でないことは世間が確信していた。松本の日本工業の進歩に対する功績は大きかつ

た。住友伸銅所も恩恵に浴した会社の一つであった。

松本に二人の娘があったが、貧乏になって結婚の支度もできない状況を伝え聞いた湯川は、内密に費用の補いをことづけた。美しい秘話であるが、湯川が貧乏を経験の賜物からである。

34. 人間味

小倉正恒はいつも直系の上司であった。支配人のときは部下の課長、総理のときは女房役の常務理事であった。春風のような人で積恩の人であった。

銀行の神戸支店長とし招かれた。出納係長が偽造の小切手を掴まされたとき、印鑑簿と突き合わせて「これなら、わしでも支払う。」と不問にした。この種の話はいくらでもある。近付いてくる中には怪しい人物もあったが、百も承知で交際していた。

35. 私党なし

住友の過去の幹部連が続々として追放解除になったが、現在の住友に何ら影響はない。終戦後6年が経過しており、実業界は新しい組織と新しい人々で一応確信を成就したところである。住友は清潔寡欲で、美風として社員間に私党が存在しない。

36. 多芸の建築家

明治の末、住友の建築部長を務めた野口孫市は世間でもよく知られていた。野口の系統を引いて優秀な技師が輩出した。その中で竹越健造は多才多芸であった。本業の建築は勿論、エッチング、能楽などに秀でていた。

その竹越もしくじりもする。大阪株式取引所が完成した暮れに、最新式の防音装置を施した新築の壁一面に植物の芽が吹き出した。株価暴騰の前兆と祝い酒を飲んだ御仁もいた。

第二章 住友回想記・後編

37. 土佐堀川

住友回想記も最初の予定回数を書き終えたが、好評だったので引き続き書く。住友には明治40年から昭和11年まで、26歳から55歳まで30年間住友に勤めたので大阪は第二の故郷になった。生活の中心は、北浜の住友総本社であった。残業をしていたら、毎晩気まぐれな蝙蝠が飛んできた。今晚も土佐堀川を飛んでいるだろうと思う。

38. 宇治の少女

関西における住友の地位は沖雲の高さであった。絶大の信用を擁していた。社員も個人としての信用も想像よりも大きく、船場島之内をはじめとして金持ちから養子の話など引く手多数であった。

住友に勤めているだけで、借家の横取りが出来たり、宇治の浮舟園に行くときに締める

ネクタイをタダでもらったことになったりしたことがある。

39. 松の廊下

住友本社に松の廊下があった。川田が陣取っていた三階の下、二階の銀行の重役室の前の廊下である。イギリスびいきの八代則彦が陣取っていて「静かに歩け。」と叱られるのであった。同じ住友人でも専門で人格、態度、性質が違って面白かった。

鉦山、工業は概して開けっ放し、朗らかで、その代り、いささか蛮的で、がさつであった。銀行はちゃんと行儀がいい代わりに、面白味が乏しかった。仕事の本務さえちゃんと勤めるならば、人間たまにはハメを外さないといけない。

[松の廊下：川田順の評価は「峻烈」ということで部下から恐れられていた。源氏鶏太は、「三階に通り抜け禁制の廊下があり、松の廊下と呼ばれていた。重役室の一角に常務理事川田順の部屋があった。誰もが例外なく仰裁案を持っていくことを非常に苦手としていた。」会社での川田はカミソリであったが、私的には親切であった。

人によって、二階、三階が、松の廊下であった。]

40. 禅というもの

入社して間もない頃、鈴木総理の邸宅で禅僧から碧巖録の提唱を聴いた。直覚として住友は金をくれないと思った。着るもの、食べるものとの最低限があれば、人間は満足して「道」のことだけ考えていろというのである。独裁者や資本家にとって禅ほど重宝な宗教はあるまい。

京都祇園で最高級の旅館を営んでいた「杉の井のお政」は、有名な女傑であった。不思議な縁で懇意であった。建仁寺の黙雷和尚のもとで座禅しているだけあって人間が出来ていて、坊さんでも、きたなければきたないと言い切る。彼女の自然にして飄逸、細心にして大胆な行動を見るたびに、禅とはこうゆうものと感服した。

興銀総裁の蓬萊市松から「住友回想記」を愛読しているハガキが来た。鈴木邸宅の茶室名は「博庵」でなく「転庵」が正しく、出典は臨濟録との指摘があった。

碧巖録 宋時代に圓悟克勤^{こくこん}によって編纂された禅の公案集。臨濟宗では最も重要な書とされている。

「鈴木馬左也」に、「新邸をつくると、茶室を建て、転庵、自笑庵と名づけた。」とある。

41. 辞令に巧み

鈴木馬左也は大物であった。晩年はかなり我儘で、癪にさわったことが折々あった。「和光同塵」という語をしていますか。「住友に勤めて物質の中に交っているながら、心は高

く、天光に接しておらねばいかん。」などと言われて、まいってしまった。

「この狸親爺め。」とつぶやきながら入室すると「君は仕事に忠実ですか。」「君のお父さんに碑文を書いてもらおうと、三度稿を改めた。君もその心懸で仕事をしなければいかんな。」上品に笑みをたたえられると、誰でもまいってしまう。

小倉正恒理事に随って弔問したとき「鈴木さんはいろいろ遺言のように話された、それを実行するのに一生では足りないが、遺戒を守って仕事するのだ。」云々。

大正5年、鈴木、小倉、川田らで中華民国を大名旅行した。上海での吸付煙草では唇から伝染すると注意され、大治では酒は辞退しても失礼でないと戒められた。大臣等の会合でも漢学の素養が深いので辞令は巧であった。北京で4月28日に袁世凱に会うと寿命はそう長くないと嘆息した。奉天では張作霖と熱心に対談して、ついにシャンペンを抜く暇がなかった。

和光同塵 仏、菩薩が自分の持っている徳や才能の光を和^{やわら}げ隠して、世俗に交って悩める人々を救うこと。自分一人が幸せになって終わりではなく、みんなが幸せになることを願って、いっしょに悲しみ喜ぶ。

42. 良寛と同郷の男

出雲崎生まれの秋山順一がいた。下関で河豚を食べたいというので野暮な洋食をごちそうしたら、一人で食べに行つて上機嫌で帰つてきた。

住友傘下の関東特殊鋼会社の社長を辞職後にニッケル、モリブデンなどの貴金属の極薄圧延する会社を創立した。国益になるというので欠損を我慢し、将来を楽しんでいた。胃潰瘍で悩んだ2ケ年のお礼と、近くに居住していたのでいろいろとしてくれた。知る人もない小さな工場に高松宮殿下が台臨された。誠実な秋山は酬いられる日は必ず到来する。

43. さすがに三菱人

三菱電機の常務で追放された間史郎はとは親しく交際した。茶人か俳諧師のような服装をしていた。シェイクスピアの研究に熱中していて、イギリス映画「ハムレット」を22回も見ていた。三菱重工業の斯波孝四郎の思い出話をした。海軍省に呼ばれて出頭すると、三菱の斯波その他も呼ばれていた。長谷川中将の部屋に通され機関将校から「この者たちが兵器の試作品を作りたいというので来てもらった。」云々。斯波は「呼ばれたから参っただけのことです。」と言い捨てて帰った。

国府津の自宅近くに三井物産の最高幹部で交易営団の総裁まで勤めた石田礼助が乞食のような服装で百姓をしていた。野菜やくだものをもたらす恩恵に浴している。三井のおん大が百姓していて、その隣で住友の番頭が歌を作っている。

茶人か俳諧師匠のような服装 十徳と考えられる。室町時代に非僧非俗の服装の流行

として、直綴じきとつから道服ができ、更に簡素化されて十徳が考案された。江戸時代には公家、武士、農民、町民に非ざる、学問や伎芸を事とする文化人が十徳を用いたので、公家、武士、町民を引退して文化人として生きた人たちも十徳を愛用した。

44. 図太い女

大正12年9月の大震災のとき、武林無想庵の妻が横浜で大けがをしたが、這って埠頭まで行ってフランス客船に乗せてもらって船中から神戸支店長宛に無電を打った。支店長はおどろいて電話で私に伝えてきた。無想庵は夕刊で妻が関西にいることを知り、それから3ヶ月拙宅にころがりこんできた。その間、大阪朝日新聞に小説を書いた。原稿料は神戸製鋼所支配人の1ケ年の収入よりも少なくはなかった。住友のインテリの中には無想庵ファンが拙宅にやってくる。奥さんはフランス料理を器用に作って御馳走する。支配人の家だからと遠慮せずに、ファンたちはゆっくりするはめになった。

文学友達のことを書くときは、小山内薫、武林無想庵を引き合いに出す。古典だとシェイクスピア、近松門左衛門、現代作家だと谷崎潤三郎と志賀直哉、歌人だと西行法師と藤原定家。賞めてくれる人もいるが、陰口きく人もいる。本人はいたって簡単で、筋の通った男である。

[小山内薫、武林無想庵：明治32年(1899)9月、第一高等学校文科から東京帝国大学文科に川田順と一緒に入学して仲良くなった二人。武林無想庵の本名は磐雄。川田は2年次に法科に移るが、小山内、武林らと文芸同人雑誌「七人」を発行する。]

45. 遅刻の常習

遅刻の常習犯であったが、たまたま半期無欠勤だったので皆勤賞がもらえるものと待っていたが、呼ばれなかった。担当者に文句を言うと、毎日出勤しても遅刻ばかりじゃ欠勤も同様と言われた。それでも支配人の湯川寛吉に直訴した。「遅刻は美德じゃないぞ。」と微笑しながら銀の大判をくれた。課長になったとき、出勤簿を監視している守衛のいじわるが告げられたので、冷酷なあつかいをするものでないと守衛を叱った。大將がこせこせしては戦争に勝てない。

46. 番頭政治

元禄以来の歴史を持つ封建の匂い高き住友であったが、昔から立憲的な番頭政治であった。大正10年に合資会社に改組して以来は、名実共に番頭政治となった。明治初年頃、家長が茶道具に凝り、千円で茶碗「六地藏」を買ったとき広瀬幸平は諫言かんげんした。家長夫人が幸平を責めたので、逆に夫人を座敷牢に押し籠めた。主人が不干渉だから重役等の責任は一層重く、献身的に努力した。

三井は2・3人が口うるさかった。三菱は番頭に任せきれなかった。

明治人の鈴木馬左也は、住友大國を明治憲法的に統御していこうと考えたのではないだろうか。家長としての吉左衛門に精神的に、儀礼的に敬意を表していた。中田錦吉も同様であった。歌人同士のよしみとは申せ、泉幸吉と一つ卓を囲んで、行儀悪ろく座ったりする私は、伝統破壊のそしりを免れないかも知れぬ。

茶碗・六地藏 小堀遠州遺愛の小井戸茶碗として知られ、京都の六地藏で入手したことが銘の由来とされる。中興名物。やや小振りで総体は明るい枇杷色で、高台周辺にはカイラギがあり、明るく変化に富む釉調の妙が見所である。明治23年(1890)に住友家第十二代友親が入手したが、存命中はこれを使う機会を得なかった。大正8年(1919)に十五代春翠が催した追善茶会で久しぶりにこの茶碗が登場し、改めて小井戸茶碗第一の名碗として認識されることとなった。泉屋博古館蔵。

47. 政治敬遠

住友には、政治に関係する勿れとの不文律が儼存^{げんそん}していた。しかし、政治にかかわらず実業ができるはずがない。明治維新の広瀬幸平の活動は、全く政治的であった。政治活動をしなかったら住友は滅亡するところであった。時勢が変遷すると住友から政治にかかわる人が現われるようになった。湯川寛吉は貴族院議員になって住友を辞し、総理の小倉正恒は、会社を引退して大臣に就任した。後進に道を譲り、もっと大きな世界で公のために尽力したいとの考えからである。

48. 住友銀行

三井銀行も住友銀行もグループ内企業に寛大な融通はしなかった。船場島之内でも「住友さんは硬すぎて、融通がきかない。」と批判するうちわの話を聞いている。

竹馬の友の山本義路が、親譲りの財産をすっからかんにしてしまつて、住友、第十五、神戸岡崎等々の銀行で不渡りになろうとしているときに、拝み倒して分割払いで勘弁してもらふことにしていった。住友銀行では、手形相当の動産類を持ってくるように言って承認されなかった。ライオンと二匹の犬に譬えて理屈に合わないダメ押しされたが、言い過ぎたと言って承認された。支払いに行くと既に帳簿から消していた。住友は硬いが、かみしめると味が深いと山本は感服した。

49. 初日が大事

京都、大阪、神戸で省線が電化された初日に試乗するつもりで梅田に行くと、阪急の小林一三は改札口に佇んで競争相手を観察していた。車掌の緩慢、発着の不手際を見てとって強敵にならないと確信した。初日だから仕方ないとの意見に対して、商売は初日が運命を決定すると答えた。

50. 大阪の同化力

大阪文化(言語、風俗、交通、商業等)は、全日本の半分を支配している。大阪の縮図の住友においても諸国から人間が集まってくるが、いつの間にか多少とも大阪化する。大阪の同化の根元は、大陸型の偉大性である。

51. 賄賂

住友と賄賂は無縁で、やりもしなければ、取りもしなかった。佐渡狐の狂言を見たとき、狂言師が演じた袖の下に絡めて話してきた。住友製鋼所の支配人をしていたとき、桑山勉がいた。出入りの商人から曾根崎の料亭で御馳走されたが、さっさと引き揚げたときに支払って帰って、商人に冷や汗を流させた。

満鉄秘書役の話では、満州の官吏や商人の結婚祝いにかこつけた贈り物は桁外れである。また、ロマンチックな賄賂の話として、松方正義に宇治から数万匹の蛸を送った男がいた。

52. セールスマンの苦心

山添程次にもう一つ面白い話がある。砲弾材料を大阪砲兵工廠に売り込むのに、6ヶ月の長期作戦を展開した。ひげを生やし、事務方を金口のタバコで誘惑して本丸の提理室まで道をつけた。ついに一度の商談で岡村中将に逢って成立させた。

53. 法経過剩

藤原銀次郎は工業大学を作り、根津嘉一郎は美術館をこしらえた。立派な事業で、巨大な資力を要することは、住友出身者に真似もできない。住友の本拠地が中央から遠かったこともある。本社を大阪から東京に移そうとの話もあったが、住友が大阪を動かなかつたのは賢明であった。

藤原の「実業界には働こうとするものには、学校教育や特殊研究などは不要である。死んだ学問は、いくら積んでも死んだ学問である。」この一節は、日本の教育方針に一大問題を提示している。私もかねてから法経系統の大学が多過ぎるのに疑問を抱いていた。

54. 数の暴力

前編で「住友電線、住友製鋼両所の争議の解条件の一つとして工場協議会の設置があったが、組織が拙なかつたので、かえって労資の摩擦になった。」と書いたが、「どこが拙なかつたのか。」との手紙をもらった。

工場協議会で時間を費やして説明して理解しても、労働者側は採決になると結束して賛成に回るから可否同数になる。多数決の票決というが、自覚がなければ不適當な方法であった。数の暴力である。多数決が墮落しないためには、個々の人が向上し、教養を高め、良心的自覚の具備が必要である。

55. 均等主義

社員の給与を決めるには、功利主義、均等主義、折衷主義の3つがある。いずれも拙い命名である。三井物産は功利主義の雄である。各自が競って利益を上げようと努力する。住友は均等主義の代表である。同じ年に同じ程度の学校を卒業してきた人は、何年たっても差が生じないので、自信の強い人はしびれを切らす。折衷主義が正しいと愚考する。

56. 寄付は金持の義務

三井に似合わないケチな男が、晩年に故郷に帰って図書館を寄付した。金に縁の乏しい住友人は、志があっても実行できない話である。

宝来市松は早く住友を見限って日本興業銀行に入り総裁になった。戦前に「宝来賞」を設けた。新宮市で、住友の湯川寛吉が寄進したという鳥居を案内された。しかし、名前はどこにもなかった。住友電線製造所の秋山武三郎は、退職慰労金の大半を故郷・米沢市の教育基金として寄付した。

家長・吉左衛門は、銅器購入に相当お金を使っていたが東洋の文化財を保護する意味を持つので賛成したが、世間への寄付が派手すぎた。小倉は「寄付は金持ちの義務だよ。」と言ってのけた。

57. 大震災と住友

東京大震災の時に、住友銀行東京支店と住友倉庫東京支店が焦土に残った。住友人の本物の誠心誠意による。

58. 住友とジャーナリズム

大正5年、鈴木馬左也は大名行列で中国視察を敢行し上海で晩餐会を行ったが、実際のところ鈴木も住友も知られていなかったらしい。海外で知られていたのは、K・S・インゴッド(別子産の型銅)だけであった。内地でも住友が確信していたほどは有名でなかった。住友はジャーナリズム方面の人々と疎遠であった。

大正10年、総本店を合資会社に改組したとき、庶務課長が重大発表をしますと案内したので、朝日新聞の天声人語で冷かされた。

59. 保名狂乱

新米社員で、初めて天神祭りを見物したときは、日本無比の庶民の祭礼に驚かされた。住友の家長も豪華な屋形船を出して奥方や令嬢を楽しませたらよさそうに思ったが、「とんでもない。」と番頭たちに制止されるに決まっていると考えた。大正の末頃、藤間静枝が来阪して、保名狂乱を演じたとき、楽屋で苦みのある顔に作ってくれと注文したことがあるが、約束事があるからと言って美男に化けた。

60. 住友式の公平

終戦直後の解体・集中排除に際して、諸財閥中、住友のやり方が最も拙かったとの批判を聞くが、格別恥にはならない。実業は「治」を前提として存在し得るもので、「乱」を予想してはできないものではない。

公平論からいうと、追放された多数の先輩らを一様に援助しなければならないが、容易にできない。せん方ないから、いい加減にすると結論に達する。几帳面が過ぎると人間味が乏しくなり、公平が過ぎると冷酷にさえなる。

61. 採用試験

学校を卒業して就職するのに暢気であった。穂積教授の紹介で鈴木総理に面会したのは、すでに一般の採用試験が済んでだいぶ後のことであった。何の質問もなく、首実検だけであった。

住友総本社の理事で人事部長を兼務して、新人採用の事務の責任であった頃を顧みると、首実検と常識的問答を試みるにすぎなかった。固くなる必要は毛頭ないのだけれど、たいていの学生は固くなってしまふ。本当に気の毒であった。プライドを持って対等の態度で応答する学生は一人もいなかった。学業成績だけでは採用しなかった。見どころを見た。

62. 後進への助言

職務も大事だが、それだけでは生きていけないから趣味を持つことになるが、勝負ごとは時間と精神の乱費に陥るおそれが多い。人生は二度とないのだから、いい加減にしておくのがよろしい。

「出る杭は打たれる。」は、誠に悲しむべき^{りげん}俚諺である。日本人のいやらしい一面である。

諸君はゆめゆめ他人の功を奪ってはいけない。「長」という者の値打ちは、全責任を自分が負うところにある。些細なことだが、風態は常に小ざっぱりしていたまえ。

63. 官尊民卑

官尊民卑は、神武このかた一貫した日本の悪習である。このことについては承知の上で入社したので痩せ我慢したが、この悪習にたびたび悩まされた。

64. 私事は自由

「公のことを立派にやっているならば、私のことなどは、他人からとやかく言われる筋合いではない」との哲理を信奉してきた。これは一会社のことではない。国家社会においても同じことである。

65. 宿命の重工業

日本の重工業の進捗は知らず知らずの間に、軍部及び国民を悲しむべき自信を与えしま

い、不必要な戦争に突入していった。

別子銅山を手に入れた250年前において、住友が他日、重工業者となるべき運命は決められていた。型銅のまま海外に輸出することは、日本のためにも住友のためにも不利益であった。そこで型銅を加工する伸銅所の創設となった。銅の加工はおのずと鋼の加工へと横に発展していった。そして戦争の外的事情が、住友その他の資本家の重工業を助長した。今後の住友人は、歴史を省察して、先輩と同じ足跡をたどってはいけない。

66. 殖林十五万町歩

維新の頃に広瀬幸平が別子銅山の周辺に殖樹した。それが今日では伊予土佐両国の分水嶺を覆い、吉野川の水源を涵養している。終戦前において住友の殖林は15万町歩に達した。一法人が経営する林業としては世界最大の面積である。住友林業は鈴木馬左也の創意によるもので、山林が住友の最後の牙城と考えていたらしい。

67. 国字改良の先駆

文化人として漢字の制限や新かなづかいの強制に反対してきた。国語の墮落は民族の衰亡である。

大正初期において早くも国字改良の必要を説き、具体案を公表した先駆者が住友人の山下芳太郎であった。外務省にいたとき、難しい日本の国語では外交戦に勝てないと痛感してカナモジ会を創立した。

68. 茶臼山

住友の本邸は元禄・正徳の頃から明治の末まで二百数十年間、島之内の鰻谷にあった。大正4年月12月に茶臼山の新邸に移転した。茶臼山を大阪市に寄付し、大正14年5月に六甲山下の住吉に再び移転した。茶臼山から住吉に移転の日取りが確定したとき、名残の謡会が催された。数番の中、家長のシテ「熊野」が謡われ、重岡がワキ、川田がツレであった。謡会で同席した家長夫妻をはじめおおかたは故人となった。

本邸：昭和12年11月、本邸を住吉から京都鹿ヶ谷に移転する。

謡会：川田順は幼い時から父に連れられて能楽堂で能を見学し、父や兄の稽古を聞いて一応の謡手になっていた。住友総本店の出納係長で、家長のお気に入りの重岡寅之助が知って推薦してくれた。

69. 歌人泉幸吉

現在の家長は、歌人泉幸吉である。大正15年3月、18歳で先代の後を嗣いだ。京都帝国大学文学部に入り、傍ら、齋藤茂吉に師事した。アララギの中堅の一人である。

家長が法経を好まず文科を選び、ことに寡欲恬淡な歌人になったので、有能な人物の合議によって経営する住友としては祝福すべきことであった。

寡欲恬淡 欲が少なく、心静かなこと。

70. 二兎か一兎か

住友回想記は筆者自身の影が薄いとの批判を住友以外の経済人からもらった。世間に披露するしくじりや手柄はなかっただけである。30年間住友に勤め続け得たのは、周囲のおかげである。家長や小倉総理には、私情において忍び難いものがあったが、将たる器でないので、辞表を出した。

折々友人から「二匹共捕えたな。」と冷かされるけれども、住友兎は、半生追い掛けたが、逃がしてしまった。芸術兎は、さらに幾倍か韋駄天的だから、一生追い掛けても、追いつくまい。細川幽齋は、兵法、和歌、能楽の太鼓、茶道、弓術、刀剣の鑑定、包丁の7芸に優れて一流であった。2匹の兎では幽齋公の足の裏もなめられない。

筆者自身 図書出版社版の解説で日向方齊は、「川田さんの仕事ぶりを垣間見た私の印象や先輩などの話を総合してみると、川田さんは天才肌で創造的なタイプ、いわゆる大変な切れ者であったと思う。」とコメントしている。

第三章 随行紀程

—省略—

後記

—省略—

5. おわりに

川田の随筆の要約をしたが、随筆の文を読まないで川田の筆先の妙味はわからない。国府津での新生活の糧を定期的に得ることとなった作品であるが、筆が軽快である。短編の連続なので是非とも読んで欲しい。「タヌキ」の呼称に別子開坑の功労者・田向重左衛門の読み名が分かるように、住友歴史の断面が解説できる。

鈴木馬左也翁伝記編纂会の「鈴木馬左也」では、馬左也の人物についての記述に実像からの距離を感じたが、鈴木総理事の女房役を務めた川田順の「住友回想記」には、馬左也の人物像がところどころで忌憚なく描写されている。

川田は、文芸知識が豊富なので、漢字の語彙をいとも簡単に使っているので、読み手にとっては歯が立たない箇所があった。

[参考文献] 五十嵐信之 「川田順—生涯と歌」 創英社